

沖縄工業高等専門学校 数理・データサイエンス・AI 教育プログラム 令和6年度自己点検・評価

評価日時：令和7年4月9日

会議名称：教務委員会（令和7年度第1回）

開催場所：沖縄工業高等専門学校会議室

目的：沖縄工業高等専門学校 数理・データサイエンス・AI 教育プログラム（リテラシーレベル）の令和6年度自己点検・評価

評価項目：文部科学省「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度（リテラシーレベル）」の審査項目の観点による評価

自己点検・評価の視点	自己評価	評価理由
プログラムの履修・修得状況	A	全学科の必修科目で本プログラムを構成しており、教務委員会において、科目の履修状況及び単位修得状況を確認している。毎年度100%の履修となっている。
学修成果	B	授業改善アンケートを実施し、本プログラムを構成する科目について、学生の理解度、満足度等を確認して、次年度以降の改善に活用している。また、令和6年度入学者から全学科で「応用基礎レベル」に対応するようにカリキュラム改定を行なって授業を実施している。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	B	学期毎に授業改善アンケートを実施し、学生の理解度、満足度、身につけることができた能力などを分析し、次年度以降の改善に活用している。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	B	全て必修科目で構成しているため、全学生が数理・データサイエンス・AIに関するリテラシーレベルを修得できることを、本校ウェブサイトで公表し、本教育プログラムに関連する科目も明記している。在校生だけでなく、入学希望者へも広く公表している。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	A	本プログラムに関わる科目はすべて必修科目としているため、全学科の卒業時の履修率は100%となる。
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	A	就職者の4割がIT関連企業に就職しており、情報系2学科においては7割がIT関連企業に就職している。高専ディープリングコンテストでは、毎年決勝ラウンドに進み入賞している。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	B	参与の会、高等専門学校期間別認証評価において、本校の情報技術教育に対して高い評価を受けた。応用基礎レベルの申請に向けて、関連企業と意見交換し、教育で実施するだけでなく、教職員も実際に使用して裾野を広げるアドバイスを受けた。
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	B	本プログラムを構成する科目において、実データの分析、実習課題等を通じ、数理・データサイエンス・AIの活用法を学ぶことの楽しさと意義を伝えている。さらに、カリキュラムを変更して、令和6年度入学者から、全学科で応用基礎レベルの内容を学習できるようにした。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「わかりやすい」授業とすること	B	学期毎に授業改善アンケートを実施し、学生の理解度、満足度、難易度などを分析している。さらに、カリキュラムを変更して、令和6年度入学者から、全学科で応用基礎レベルの内容を学習できるようにした。

A:自己点検・評価の視点を上回る成果を達成できた

B:自己点検・評価の視点の通り、成果を達成できた

C:自己点検・評価の視点の通りの成果を達成できなかったが、達成に向けての対応策が立案され、対応に着手している

D:自己点検・評価の視点の水準まで成果を達成できなかった。さらに、達成に向けた対応策が立案されていない

沖縄工業高等専門学校 情報通信システム工学科 数理・データサイエンス・A I 教育プログラム 令和6年度自己点検・評価

評価日時：令和7年4月9日

会議名称：教務委員会（令和7年度第1回）

開催場所：沖縄工業高等専門学校会議室

目的：沖縄工業高等専門学校 情報通信システム工学科 数理・データサイエンス・A I 教育プログラム（応用基礎レベル）の令和6年度自己点検・評価

評価項目：文部科学省「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度（応用基礎レベル）」の審査項目の観点による評価

自己点検・評価の視点	自己評価	評価理由
プログラムの履修・修得状況	A	情報通信システム工学科の必修科目で本プログラムを構成しており、教務委員会において、科目の履修状況及び単位修得状況を確認している。毎年度100%の履修となっている。
学修成果	B	授業改善アンケートを実施し、本プログラムを構成する科目について、学生の理解度、満足度等を確認して、次年度以降の改善に活用している。また、令和6年度入学者から全学科で「応用基礎レベル」に対応するようにカリキュラム改定を行なって授業を実施している。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	B	学期毎に授業改善アンケートを実施し、学生の理解度、満足度、身につけることができた能力などを分析し、次年度以降の改善に活用している。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	B	情報通信システム工学科の必修科目で構成しているため、学科に所属する学生が数理・データサイエンス・AIに関する応用基礎レベルを修得できることを、本校ウェブサイトで公表し、本教育プログラムに関連する科目も明記している。在校生だけでなく、入学希望者へも広く公表している。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	A	本プログラムに関わる科目は、情報通信システム工学科の必修科目としているため、情報通信システム工学科の卒業時の履修率は100 %となる。
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	A	情報通信システム工学科の就職者の約6割がIT関連企業に就職している。また、情報通信システム工学科の学生は、高専ディープリンクコンテストにおいて、毎年決勝ラウンドに進み入賞している。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	C	参与の会、高等専門学校期間別認証評価において、本校の情報技術教育に対して高い評価を受けた。応用基礎レベルの申請に向けて、関連企業と意見交換し、教育で実施するだけでなく、教職員も実際に使用して裾野を広げるアドバイスを受けた。
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	B	本プログラムを構成する科目において、実データの分析、実習課題等を通じ、数理・データサイエンス・AIの活用法を学ぶことの楽しさと意義を伝えている。さらに、カリキュラムを変更して、令和6年度入学者から、全学科で応用基礎レベルの内容を学習できるようにした。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「わかりやすい」授業とすること	B	学期毎に授業改善アンケートを実施し、学生の理解度、満足度、難易度などを分析している。さらに、カリキュラムを変更して、令和6年度入学者から、全学科で応用基礎レベルの内容を学習できるようにした。

A:自己点検・評価の視点を上回る成果を達成できた

B:自己点検・評価の視点の通り、成果を達成できた

C:自己点検・評価の視点の通りの成果を達成できなかったが、達成に向けての対応策が立案され、対応に着手している

D:自己点検・評価の視点の水準まで成果を達成できなかった。さらに、達成に向けた対応策が立案されていない